

肉身を大地に受けた。

肉身あるがゆえに食わねばならない。肉身あるがゆえに罪悪があり、煩悶がある。しかし大乘菩薩道を念仏の中に発見する時、肉身あるがゆえの道であり、仏であった。物や肉身はわれを殺す地獄ではなくて、真にわれを生かす浄土であった。

私は私の肉体をいたわつてやります。

お腹が悪い時には一口のご飯すら百回もかんでやります。あまり疲れたと言いますから、横になつて眠らせてやります。

壇上に立てば、私の心のままに、立ちつづけに三時間でも働いてくれます。

私は地上に肉身を受けました。それを喜ばずにはいられない。よしこの身がいかなる苦難の中を歩もうとも。

喜怒哀楽もこの肉身を受けたがゆえに味わわれます。法蔵の願心もこの肉身あればこそ、誕生するのであります。

四月八日は釈尊の肉身を受けられた尊い日、五月二十一日は親鸞聖人が肉身をお受け遊ばしたためたい日であるように、私は私が地上に肉身を受けさせていただいたことを尊ばないではいられない。

「何だ、あいつか。あの男が何になるものか。あの男のことならおれが知っている。だめな奴だよ。」

「あなたはその人を知っていますか。何年くらい前のことを知っていられますか。」

「十年前だったかなあ、あの男に一度会ったことがある。」

だが十年前のその人と今のその人とは同一ではない。古い過去をもつて今の人を推量することは悪いことだ。厳密に言うならば、昨日の彼と今日の彼とは一つではない。彼はその間にいかなる変化をとげているかも知れない。

大工の弟子も五年たてば素人しろうとから玄人くろうとになる。

卑怯者

卑怯者！ 何ゆえに右に行くように見せて左に行くか。何ゆえに善人顔をして自らを偽るか。暗いのも無理はない。愚痴が出るのも無理はない。なぜ強く汝は汝の足で、汝の道を歩まないのか。汝のような卑怯な善人、他律的な人形、それが葬られるところを地獄というのだ。

あきらかに見よ

「なぜ暗い顔をしているのです。」

「私は今日夫にそむいて出て来ましたから。」

「叱られたらと思つて心配なのですか。……………それならすぐお帰りなさい。」

「講演を聞かねば帰られません。」

「それなら聞いて帰りなさい。」

「でも帰った時がこわいのです。」

「幽霊！」

「え！ 私が……………？」

「死の存在！ 幽霊！」

「でも私がこうして道を聞かしてもらって、少しでも明るく、やさしい妻になりましたら、あの荒んだ夫がよくなろうと存じまして。」

「馬鹿！ 火の消えた火鉢！ 愚痴の幽霊！」

「間違っていますか……………」

「ペテン師！ 詐欺師……………幽霊！」

「私はどうすればいいのです。」

「自分が幽霊のくせに、夫を生かすの何があるか。荒んでいるのは夫じゃない。貴女だ！」

「でも夫の仕打ちがあまりです。昨夜も私は……………」

「正宗の名剣が真綿で打つてできるか！」

「え……………それでは……………」

「愛せられて甘え、叛かれて泣く、幽霊の浮かぶ瀬はない。」

「私は幽霊でした。しかしいつまでも幽霊であつてはなりません。私は聞きます。そして夫よりも私が救われねばなりません。何だか新しい世界が開かれたようです。」

「あきらかに見なさい。あなたを碍げる何ものもありません。あなたの夫だつて悪人ではないのです。あなたの道を決定してくれる善知識かも知れません。」

「私はもう泣いてはいません。幽霊であつてはなりません。」

懺悔を語つて懺悔せず。喜びを語つて喜ばず。道を語つて道を踏まず。悪人を語つて悪人ならず。

自己を偽る者の灰色の流転、汝何がゆえに素裸に直接せざる。汝を迷わす狐、汝の内に巣くう汝、すなわち狐そのものなるを覺らずや。